

『海国少年』の読者像に関する一考察

田中 卓也¹⁾

The Study of Consideration of Readers Image in “KAIKOKU SHONEN”

Takuya Tanaka

Abstract

This paper is aimed to consider of readers image of the magazines with many boys composed with “KAIKOKU SHONEN” readers were conscious. “KAIKOKU SHONEN” was not the publishing business and advertisement media in those days. The monthly (magazines) had the small circulations. The magazines were popular among with the upper grades elementary school children, junior high school students. Most of those boys were the class of readers were composed of loved magazines fan club. It was made of success acquisition of those magazines fan. Most of fan formed the “readers (fan) communities”. they were merkmal of the image of model for boys fan of “KAIKOKU SHONEN”. However, it was short-lived. it was committed to the goal of educating child soldier of many boys readers.

Key words: “KAIKOKU SHONEN”, boys soldiers, the readers communities,
sense of solidarities, bond

キーワード：『海国少年』，少年兵，読者共同体，連帯意識，絆

I はじめに—本研究の目的と先行研究の 検討—

本研究では、東京海国社発行の雑誌『海国少年』をとりあげ、同誌が発刊されていた大正期における同誌の読者の姿とその特徴を明らかにすることが目的である¹⁾。また同誌の読者像がいかなるものであったのかについて見い出すことに努めるものである。

さてこれまで執筆者は、日本における近代少年雑誌の『少年世界』（博文社）、『少年界』（金港堂）に着目し、同誌の投書欄に集った子ども読者（児童読者）に焦点を当て、その読者の年齢層および

その特徴について明らかにした²⁾。そこでは『少年世界』誌が日本の少年雑誌のなかで、1895（明治28）年という早い時期に発刊することになったことや、同誌の読者層がおもに小学校高学年から旧制中学校に通学していた少年らであったこと、さらに同誌に集った少年読者らは、投稿欄に積極的に投書を寄せ、誌面上での交際を行いながら、互いに優秀作品の製作に意欲を燃やしたり、文章能力の向上のために互いに切磋琢磨しながら健筆を振ったことや彼らは自らを「文士」と名乗り、投稿欄上で一心不乱に優秀作品をつくることに精力を傾けたことが明らかになっている³⁾。

また拙論「近代少年向け雑誌『少年界』に関する

1) 育英大学教育学部教育学科児童教育専攻

る一考察—読者の分析を中心に—」（『関西教育学会年報』通巻第34巻、2010年）では、『少年世界』と同じく小学校高学年から旧制中学校の児童や生徒らが読者対象であり、日本が日露戦争を経験するなかで国家主義的な思想が形成され、同誌読者からもその思想の影響を受け国家主義思想に傾倒していくことになった⁴⁾。同誌では彼らの読者意識としてのメルクマールも形成されたことについて見出した。

さらに拙論「近代少年雑誌における読者の共同体形成に関する一考察—『少年界』・『少年世界』の子ども読者の比較を通じて—」（『関西教育学会年報』通巻第36巻、2012年）では、当時少年読者を多く獲得することに成功していた両誌の読者らが作品投稿を通じて、上級学校への進学意識を持ち、投稿者をライバルと見立て、さらに立身出世を目標に邁進する姿が見られることが明らかになった⁵⁾。

両誌では投稿者の剽窃行為が頻繁に生じていたことから問題視されており、剽窃した投稿者を筆誅（公開処刑）して戒めるといような厳格なルールが敷かれたなかで投稿を行うというものであった⁶⁾。

明治期から大正期にかけて少年雑誌と同じくして少女雑誌も既に発刊されていた。

たとえば日本最初の少女雑誌であるといわれる『少女界』（金港堂、1902年）をはじめ、『少女世界』（博文館、1906年）、『少女の友』（実業之日本社、1908年）、『少女画報』（東京社、1912年）などが存在する。紹介した少女雑誌には「投稿欄」が設定されており、投書を通じての交流が図られた⁷⁾。

少女雑誌では、投稿欄を通じて少女読者らが互いに名前（はる子様、夕子嬢など）ペンネーム（須磨の小夜子様、松風の少女、淋しい一少女など）を用いて相互に呼び合ったり、疑似姉妹としての契りを交わしたりするなど親密性を求めることに重きが置かれている⁸⁾。今田絵里香は少女独特の

共同体について「少女ネットワーク」と呼称している⁹⁾。

かくして少年・少女雑誌に関する先行研究は、これまでに多くの蓄積が見られる。先述した今田は自著『少女の社会史』（勁草書房、2007年）において少女雑誌『少女の友』・『少女倶楽部』を分析対象とし「読者が少女雑誌に示された『少女』の行為規範の変遷を明らかにし」ながら、「読者が少女雑誌の提示する『少女』をどのようにとらえ、受け入れていったのかについて明らかにし」ている¹⁰⁾。また川村邦光はとりわけ少女雑誌（『女学世界』・『少女世界』）に集った少女読者らには、目には見えない「想像上の読者共同体」（オトメ共同体）が存在していたことを検証し、これを「少女幻想共同体」と名付けている¹¹⁾。川村は明治後期の少女雑誌を考察し「少女雑誌が投稿欄を通じたネットワークによって、近代少年雑誌における読者に関する一考察では、女学生の資格という有無にかかわらずなく、ペンネームを用いて『少女』という『虚構集団』を形成させた」と指摘する¹²⁾。また1900年代前後の時期の『少年世界』の読者を取り上げている成田龍一の存在も見逃せない¹³⁾。

かくして先にあげた金港堂、博文館、実業之日本社など大手老舗出版社の少年雑誌ばかりではなく、目立ちはしないが小さな出版社においても少年雑誌は発刊されていた。「海国少年」と雑誌のタイトルにあるように、「海国」に特化した少年雑誌についても短命であったが少なからず存在していた。ここではその短命に終わることになった『海国少年』に光を当て、同誌の読者像を見いだす。読者像を見出すことで、雑誌の発行された背景やそれをこぞって読むことになった読者の姿も浮かび上がってくることになるであろう。

II 雑誌『海国少年』について

同誌は、1917（大正6）年3月10日（創刊号4

月号)として海国少年社より発刊された雑誌である。出版社は東京海国少年社(東京市南佐久間町1丁目1番地)であり、発行人・編集人は橋本猛義・沼野保吉がこれを担当している。同誌の定価は1冊あたり11銭であり、創刊号から同値段であった。3冊で30銭、半年分で59銭、1年分で1円18銭の経費を要した。創刊号から11銭であった同誌は、第3巻第1号より1冊20銭に値上がりを見せることになった。ページ数は全80頁から全104頁へと大幅に増加した。同誌をどのくらいの読者が購読していたのかは資料がないため、不明である。読者の多くが小学生、中学生であったことは投書、作品投稿欄などからうかがい知れる¹⁴⁾。

同誌第2巻第2号(1918年2月1日号)では、「先生、私はこのたび東京の第二中学校に進学いたします」(京橋 中島三葉)や「私は高等小学校を卒業して、家事に従事しているものですが、投書しても構ひませんか」(京都市 上野遠之助)、同誌第5巻第8号(1922年8月1日号)では「記者先生、神奈川県岩沢君が通信せられまして如く、我高等小学に於いても、早くから学級会、役員会といふものが出来て居て我々は盛に論議を戦はして居ます。学級学校の方針を論議するのです」(新潟 坂井天涯)を見てみると、高等小学校、中学校への進学を伝える内容が見て取れよう。

また同誌第5巻第1号(1922年1月1日号)に掲載の「俳句」の投稿欄を見てみると、「がらと煙突曳行く火事の跡」(愛知県 新見新一十)、「姉上に弟出しぬ火事見舞」(神戸市 澤井善三 十二)のように、住所と年齢が記載されている。

さらに同誌第4巻第8号(1910年9月1日号)では読者から写真の提供があり、「山口県東口布施小学校」(山口 濱田三夫君寄)、「朝鮮仁川公立尋常高等小学校」(仁川 立花太郎君寄)と誌面に掲載されている。読者が通っている学校の写真であろうか。遠くはるばる「朝鮮仁川」の地に

住む読者からの写真の提供もみられ、同誌が内地外でも購読されていることをうかがわせる。

また学校で「回し読み」などは行われていたかもしれないが、その様子を伝える記事は一概にはっきりしていない。

ところで同誌はどのような趣旨で刊行されることになったのか。創刊号(第1巻第1号)の「発刊の辞」には次のように記されている¹⁵⁾。

私共は、此の欧州の大戦争が済んだ後、日本の少年も立派に文明国の少年として、世界の檣舞台に立つて、欧米の少年とその優劣を争ふやうな時代の来ることを信じて居ります(中略)その為めには在来の少年雑誌のやうな低能児相手では駄目だと信じて、此処に理想的の少年雑誌『海国少年』を発行するのであります。(中略)『海国』といふ名を附けたのは、日本が海国であるといふことを少年の頭にしみこませて、海といふものにもっと親しみを持たせ、将来海外の発展に志すやうにさせたいといふことも一つの理由であります。少なくとも海国少年らしいといふ、形容詞の廣く行はるるに至らんことを望むものであります

同誌の発刊趣旨については、「日本の少年も立派に文明国の少年として、世界の檣舞台に立つて、欧米の少年とその優劣を争ふやうな時代の来ることを信じ」ながら、「日本が海国であるといふこと」について少年読者らが認識させていくことであることが読み取れよう。「海国少年らしい」少年読者のための雑誌であることを願っている。このことから同誌の表紙については、「海軍兵士」や「兵士を志す少年」らが描かれることになった。

しかしながらそれは長く続くことなく、同誌の途中より、「おしゃれな少年」、「雪合戦を楽しむ少年」などに変化することになった。時期を経て再び兵士の表紙絵に回帰することになった。同誌

の出版方針に迷いが生じ、統一性がない時期があったのかもしれないことをうかがわせるものである。

同誌の誌面構成はどのようになっていたのか。同誌第1巻第2号より何うことにしたい¹⁶⁾。目次の中の下線部は執筆者が付した。

〈目次〉
▽英国少年騎兵（表紙）……樺島画伯筆
▽龍攘虎撃（ジュットランド英独大海戦）……口絵同（樺島）
▽露単騎奮戦……扉同（樺島）
挿絵は樺島画伯が天才的妙腕を揮つて実際に近からしめれば各国の軍人の服装及び軍艦の型式其の他一般の風俗は読者諸君の参考の資となる所多大ならん
■記事■（ ）内はページ数
・伯ツエツペリン物語……一記者（二）
・少年小説 目白の死……川村花菱（六）
・滑稽ポンチ……目出男（一三）
・活動少年 少年斥候の最後……高山湖声（一四）
・西洋探偵 十萬円の謝礼……森不蘭（二〇）
・滑稽会場フィルム……法螺太郎（三一）
・カイゼルの最後……殺生石（三七）
・少年バック（太郎の魚釣り）……目出男（四六）
・雨か風か……倉富砂郎（四七）
・事実談 南極の氷に囲まれた探検隊……鐘美道人（五五）
・日本海海戦 皇国の興廃此の一戦にあり……某海軍中佐（六七）
・科学の力（ペリスコープに就いて）……理学士 鈴木滋（七三）
・冒険小説 悪夢（只見る暗黒なる土牢の中）……髭の冠者（七六）
・野良土産……与作（八四）
・少年小説 少年探偵の大活動……横山二郎（八五）
・出郷（詩）……濱之助（九〇）
・大懸賞世界六大洲当て……（九二）
・読者文芸……（九三）
・読者通信……（九四）
・次号の壮観……（九五）
・編集だより……（九六）

同誌創刊号より、1冊の価格は変化ないが、ページ数が増加している。「小説」が多くを占めている。同誌が読み物として発刊されていることがうかがえよう。また「日本海海戦」にみられるように戦記物の内容が意外と少ないことに気付く。タ

イトル『海国少年』というイメージはあまり強烈ではない。

では『海国少年』のイメージはどこから見ることができようか。同誌挿絵担当の樺島の記載が目につく。「▽英国少年騎兵（表紙）……樺島画伯筆
▽龍攘虎撃（ジュットランド英独大海戦）……口絵 同（樺島）
▽露単騎奮戦……扉 同（樺島）
挿絵は樺島画伯が天才的妙腕を揮つて実際に近からしめれば各国の軍人の服装及び軍艦の型式其の他一般の風俗は読者諸君の参考の資となる所多大ならん」とあるように、樺島の絵の描写技術を熟知したうえで、同誌読者らも参考にとよいと付言していることも興味深い。

Ⅲ 読者通信欄「読者通信」の機能と読者共同体の存在

1 「読者通信」の機能と愛読者の存在

明治期から発刊されていた日本の少年雑誌には、巻末・後頁あたりに「読者投稿欄」が設定されているのを見かける。投稿欄を通じて、読者らは互いに交流できる仲間を見つけ出し、誌面を通じて交友関係を構築した。学校で友人をつくろうとせずとも、同誌を購入し、回覧するなかで、誌面上で仲間を見つけるということができたのである。少年雑誌と少女雑誌には特徴に差がみられる。少年雑誌ではおもに、ライバルを見つけては、厳しい受験を勝ち抜いて進学校・難関校をはじめとした（地元の）有名校に入学したり、誌面の投稿欄に詩・短歌・俳句や絵画、書道作品などこぞって優秀作品を生み出すことを競う、切磋琢磨できる愛読者仲間を見つけ、交流するのがひとつのパターンであった。また読者同士の交流よりもむしろ、出版社を総体とした形式で、文通をする読者も存在した。

執筆者は、集英社が第二次世界大戦後の1949（昭和24）年に刊行した『おもしろブック』について、研究調査を行っている¹⁷⁾。

そこでは創刊当初より終刊にいたるまで、読者の投稿欄を設けていた。名称も「文ちゃんクラブ」と称し、終刊まで改称されることはなかった。「文ちゃん」とは編集部の総体として位置づけており、正体は明かされていなかった。誌面においてもすべて「文ちゃん」の呼び名で通していた。およそ1頁ほどの紙幅であって、当初は3~4人程度であり、ピーク時には15人程度のことも存在した。読者からの投書に、編集部（文ちゃん）が回答するような形式を採用していた。

かくして「読者投稿欄」は読者おのおのが意識表明できる場所であり、友人と文通を自由に交わすことができるような談話室・娯楽室・サロンの役割を有していた。『海国少年』の読者投稿欄として「読者通信」というものが存在していた。「読者通信」がどのような内容となっていたのか、次のところで伺ってみたい。

2 読者投稿欄における樺島人気

『海国少年』の投書欄「読者通信」には、樺島のイラストの評判が毎回のように掲載された。以下にその投書内容を見てみたい¹⁸⁾。

■海国少年の発刊を祝し申す。『海国少年!』
ああ何と云ふ雄大な勇ましい名でせう。今から首を長くしてまつています。ああ早く第二号を見たい、見たい! (名古屋 若山曇一)

■私は『海国少年』の創刊号が本屋の店に飾られると同時に買って中を見ましたが、大いに気に入りました。

第一『海国少年』といふ題が好きす。我等海国男児に相応しいではありませんか。次は中の図が皆好きなペン画でした。(堺 林田悦三)

「名古屋 若山曇一」、「堺 林田悦三」らの投書である。「海国男児」が男らしい勇者であるイメージが読み取れよう。同誌の次号を求める様子

や気に入られている様子が伝わってくる。また次の投書についても見てみたい¹⁹⁾。

■記者様愛読者になりました。樺島先生のペン画はいつ見ても立派ですね。今後毎号妙腕を發揮せられん事を希望します。(東京府下 曾我敬二)

■海国少年……お何といふ雄々しい名でせう。私は此度本誌の愛読者になりました。飛行少年以来久しく見なかつた樺島画伯の妙筆に接し、この様な嬉しい事はありません。樺島先生、御身体御大切に……(筑後 山口鉄腸)

「曾我敬二」、「山口鉄腸」の投書である。曾我の「樺島先生のペン画はいつ見ても立派ですね。今後毎号妙腕を發揮せられん事を希望します」や、山口の「飛行少年以来久しく見なかつた樺島画伯の妙筆に接し、この様な嬉しい事はありません。樺島先生、御身体御大切に」との言葉より、樺島の（表紙絵の—筆者註）ファンであることを伺わせる。山口は『飛行少年』以来の樺島のファンであろう。かくして投稿者のなかには、樺島の熱狂的ファンが存在していた。同誌第1巻第2号の「編集だより」には、「本誌の樺島画伯の画は本誌の誇りの一つであります。初号を御覧の方は言はずして御分りの事ですが、画伯のペン画は凡て実物通りに描かれております」と記述されており、樺島への信頼度の高さを感じさせる。

また投稿者の「山口鉄腸」に交際を求める投書家が存在し、「福岡の山口鉄腸君誌上で御交際を請ふ」（広島 藤井翠城）（同誌第1巻第6号の「読者通信」より）と寄せている²⁰⁾。さらに樺島への投書は寄せられた。以下の「読者通信」を見てみたい²¹⁾。

■樺島先生が御入社なされたのですね。私は先生の御書きになつた絵画を集めて居ります。(高知県 岩戸秀夫)

■樺島画伯に懇願して御得意の戦争、自動車、艦船飛行機等の画集を出して下さい（五月号を手にせし夜、HH）

■樺島画伯の挿絵は実に立派でした。他雑誌では見ることの出来ない所です。しかし口絵をペン画でなく、彩色の戦争画になされたならば一には一点の非難もありません。（京都府松本宇之祐）

■樺島先生 お懐かしうございます。私は先生のを手本にしてペン画を自習し今は私のクラスの中の一番の絵かきと云はれています。幸に先生によつてこの面白い雄壮な本誌をたたくことを喜びます（本郷 悲鳥生）

同誌第1巻第3号には15の投書が掲載された。そのうち半数以上の投書内容が「樺島画伯の絵」についてというところに、読者の関心の高さがうかがえる。のちに2ページの紙幅となり、投書数も30~40近くまで増大した。投書中の「京都府松本宇之祐」は同誌常連の投書家であり、樺島をこよなく尊敬する「樺島親派」のひとりであったとされる。

また同誌第1巻第3号では、「海国少年誌友支部」の結成についてふれられている。以下に見てみたい²²⁾。

▽海国少年誌友支部は本誌購読者十人以上の団体を以て組織す

▽支部を設置せんと欲するものは、その会員の宿所姓名年齢等を記して、本社の認定を経べきものとす。

▽支部員は『海国少年主義』の実行者たるべきこと

▽支部員は毎月一回支部小会を開くべき事

▽支部員中に慶事若しくは不幸等ある時は、本社はその通知に接し、御同慶或は御同情申上ぐ可し。

「海国少年誌友支部」を結成させ、読者獲得を努めるのみならず、「海国少年主義」の徹底を進めようとしていたのではないだろうか。「絆や連帯の強さ」を感じさせる。

また「絆や連帯の強さ」は、以下に紹介する「親愛なる読者諸君へ 記者」からもうかがうことができる²³⁾。以下に見てみたい。

第三号になりまして、記者と読者との間の関係が一層親密になりましたので、記者は弟に対する心持で申したいのであります。それは本誌の読者諸君は皆な『海国少年らしく』といふことが行つて見るとそんなにやさしい事でもないのであります。海国少年は体が丈夫でなければなりません。海国少年は快活でなければなりません。海国少年は希望をもつて勉強しなければいけません。海国少年は常に心が晴れ晴れして、陰険であつてはなりません。海国少年は研究的でなければなりません。海国少年は情愛にあつくと同時に、よく物を判断して見なければなりません。海国少年は男らしくなければなりません。海国少年は高尚な趣味を有つていなければなりません。海国少年は長上を敬はなければなりません。これが記者の申す『海国少年らしい』少年であります。（中略）この反対に、顔の青ざめた、不勉強な、陰険な、冷淡な、城野雨水、頭脳のはっきりしない、女らしい、低落した趣味を有つた、生意気な少年を見て、私共なり、諸君なりは、『ああ、いい友達よ!』と云つて、その少年に近づいて握手を求めらるでせうか（中略）記者は本誌の読者が皆な一人残らず、かういふ『海国少年』であつてほしいのであります。

海軍兵士が求められる内容が『海国少年』読者にもとめられていた。読者を「弟」と呼称した。同誌で海国少年といわれるような読者に育てよう

とした。

では『海国少年』の読者らは、どのような読者意識を持っていたのだろうか。「読者通信」が誌面より確認できた創刊号から第1巻第8号までを取り扱い、分析を行った。通信欄の記事で20以上登場するキーワードを以下に掲載したい²⁴⁾。

表1 通信欄に登場したキーワード（20以上のもの）

・「海国少年」
・「勇壮」「おお、勇壮」「なんて勇壮な雑誌」
・「雄々しい」
・「男らしい」「男児」
・「少年雑誌の霸王」
・「樺島先生」「樺島画伯」
・「愛読者」「愛読者諸君」「愛読者様」
・「本誌」
・「記者様」
・「本屋」「書店」
・「雑誌」

先述したが「海国少年」の読者には「勇壮」「男らしい」などのイメージを有する。

3 「海国少年らしく」という言葉の使用と「剽窃行為」の横行

読者のなかには、「海国少年らしく」という言葉を投書で使用する者も少なくなかった²⁵⁾。

「浅草 穂利邊蘭風」の投書によれば、「先生、僕は少年です。海国少年です。しかして常に少年らしい作品を愛します。従って「我が読者はみな海国少年らしくあれ」と申さるる先生の御言葉の通り盛んなる本文壇へも常に『海国少年らしく』活気満ちたる男子的な作品を乗せてください。併し僕は易しい悲哀の歌が悪いと云ふのせはありません。それよりも常に元気ある、活気ある『海国少年らしい』作品を載せられたなら、本誌の発展上、又は先生の申さるる『海国少年らしい』の御言葉にもかなふかと思ひます。」

「浅草 穂利邊蘭風」の投書にもみられるよう

に、読者らにも「海国少年らしさ」が伝わっている感があるようである。また海国少年と誇らしげにする投稿家のなかには、ときおり「剽窃行為」も見られた²⁶⁾。

神聖なる海国少年をけがす人ありや！秋田の菅原晋二君心らば改悛の程を！さうして永く好誼を請ふ！僕は早くよりの飛行少年愛読者でした！此の新しい男子的な理想的なる本誌あらはれて以来愛読者となつたのです。未筆ながら記者様御健全に此の北国の我町でへ避暑かたがた御来遊のほどを！（小樽北海道雑穀株息会社 吉田紅陽）

「神聖なる海国少年をけがす人ありや！秋田の菅原晋二君心らば改悛の程を！さうして永く好誼を請ふ！」という冒頭文より、「菅原晋二」の剽窃行為についての反省を願う吉田紅陽の投書である。吉田が筆誅されている菅原に対し改心を願うばかりか、今後の交流も求めているところが興味深い。多くの少年雑誌にみられるが、剽窃行為は「ご法度」とされているところが多く、筆誅（公開処刑）もやむなし、というのが通常の事情であるが、吉田は他人にやさしく、思いやりを持った読者であったのかもしれない。そんな一面が垣間見れる。また次の投書を見てみよう²⁷⁾。

東京の赤城君に与ふ。赤城山人君よ。君は海国少年の文芸欄を何と心得て居給ふぞ。いやしくも 吾が海国少年文芸欄は神聖なるぞ。亦是に集中する投書家及び読者は賢明なるぞ。君は知らずや。幾千通と集つた吾が海国少年投書家の玉稿選択に疲れたる記者の眼を盗ませんとせし君の心底が恐れて憎悪の感禁じ得ず。君よ良心あらば覚めよ。君の本誌七月号の一口嘸は古い或る雑誌に歴然と残っているよ。其の名も公開しようか。余は君の為満天下諸家諸君の為め海国少年前途の為め端な

くも本誌の末端を汚したるを遺憾とす（九州の一角より 忍村漁士）

この投書の場合は、剽窃者への公開処刑であろうか。『海国少年』の品位を落とすような行為への痛烈批判ともとれる。『海国少年』を愛してやまない読者（投書家）の思いである。投書家らは剽窃行為など目に余る投書家の行為に対し「正義」を貫いた。

IV 『海国少年』の休刊

1 少年他誌の相次ぐ廃刊

昭和期に入るとわが国は世界恐慌や金融恐慌のあおりを受け、国内に大きな不景気の波が押し寄せることになった。景気の悪循環はますます深刻化を増した。これに伴い軍国主義の道に日本は突き進むことになった。戦時体制は、雑誌などにも影響を与えた。

大正時代に売り上げを誇っていた大衆児童雑誌『赤い鳥』（赤い鳥社、1930年に一時休刊、翌年より復刊するも、1936年に主幹鈴木三重吉の死により廃刊）、『金の星』（金の船社、1928年廃刊）などもあおりを受け、廃刊を余儀なくさせられた。さらに太平洋戦争下においては、出版界への雑誌の統制はますます厳しくなり、児童雑誌は統合整理され、廃刊されていくことになった。『少年世界』の誌面もまさに戦時色を帯びた内容のものが続々と掲載されていった。

『少年世界』第33巻第1号（1927年2月1日）の「読者通信」欄には、「記者先生僕は十二月号を読みましたが、ほんとうに立派でしたね。殊に「日米大決戦」等は息もつかずに読みました」（樺太熊谷基）の投書からもそのことは読み取れるし、同誌第33巻第5号（1927年5月1日）には、投書家による「潜水艦」の漫画が掲載されている。しかしながら、突如として廃刊の時は訪れる。1934（昭和9）年1月号をもって約50年継続発行されてきた『少年世界』は廃刊となった。また

4年後の1938（昭和13）年10月には、ライバル誌であった『日本少年』も廃刊の憂き目にあうことになった。

2 戦争の激化と『海国少年』の休刊

第一次世界大戦の激化とともに、突如『海国少年』は一時休刊することを余儀なくされた。同誌に掲載された一時休刊のお知らせ（給仕 竹内信一）について、以下に見てみたい²⁸⁾。

皆さん御目出度 給仕 竹内信一

私は海国少年が一時休刊しましたので、暫らく皆さんと御話ができませんでしたが、此の御目出度新年を迎えると共に又皆さんと御話が出来る様になりましたのは何より嬉しいのです。

私も海国少年と共に一つ歳をとりました。今年午の年で私の年です。私は十三歳になったのです。大いに腕を振って活躍させよう。今度の海国少年の記者先生も大分変りました。高山先生も、目出男先生も北村先生も横山先生もおりません。殆んど全部変わってしまひました。樺島先生はやはり本紙に腕を振はれております。今度宮崎一雨先生も本誌に御書きになる事になりました。今度の海国少年には記事も皆一粒選りで出来上がつておるのです。今度こそ此の海国少年を理想的海国的雑誌にしてみたいと各記者先生達が、面白い原稿を澤山集められています（以下略）給仕としての私は投書整理掛と云ふ重大任務を帯びます。最も私が選者になる訳ではありませんが仕分けだけは私の役目である。皆様私にコミッションを出さないと入選しませんよ

給仕の竹内信一の手によるものである。給仕は、出版社のなかで、雑用をはじめとした諸処の仕事を任されることが多く、雑誌の誌面においての読者らに紹介されることも少なくなかった。雑誌に

よっては給仕は、「●●さん」、「○○ちゃん」のように編集部の総体として示されることも少なくなかった。読者からすると主筆や作家らよりも近い距離にいる存在であることが多く、親しまれる者も少なくなかった²⁹⁾。例えば、『幼年倶楽部』（講談社）の誌面の投稿欄にはマスコットキャラクターとして「幼ちゃん」なる編集者の総体が存在し、投稿者からも支持が厚く、好評であった。同誌投稿欄では幼ちゃんにお便りを書く読者もいれば、愛読者同士が互いに手紙交換を行う者もいたようです。投稿欄には同誌が届くのを楽しみにしながら「唯一無二の存在」として表現したり、「お友達」ととらえるものも少なくなかったといわれる³⁰⁾。

さて話を給仕の竹内に戻したい。その給仕の竹内曰く「私も海国少年と共に一つ歳をとりました。今年は午の年で私の年です。私は十三歳になったのです」とあるが、はたして年齢が「十三歳」であるか否かについては、文面からの判断が難しくにわかに信じがたい思いもある。「給仕としての私は投書整理掛と云ふ重大任務を帯びます」とも書かれているので、ますます年齢が不詳の思いになる。文末に「皆様私にコミッションを出さないと入選しませんよ」と竹内が述べていることは、なんともいじらしい³¹⁾。

さてここで竹内が述べるように、海国少年社の編集の方針転換であったのか、それとも執筆者同士の考え方の違いからの内部対立であったのか、事の真相は判明していない。「今度の海国少年の記者先生も大分変りました。高山先生も、目出男先生も北村先生も横山先生もおりません。殆んど全部変ってしまひました。樺島先生はやはり本紙に腕を振られております。（中略）今度こそ此の海国少年を理想的海国的雑誌にしてみたいと各記者先生達が、面白い原稿を澤山集められています」とあるように「理想的海国的雑誌」づくりに専念するための人事刷新であったのかもしれない。そして以前樺島の人気は安定していることものぞか

せる。同誌の発刊に樺島は欠かせない人物であったことを想像させる。

同誌第2巻第1号より、「読者通信」欄が消滅する。しかし「文芸投稿欄」は変わらず掲載され、募集告知も見られることになった。同誌第2巻第1号では「再刊を祝す」読者の声が掲載された。なか価格は創刊時と変わらず「11 銭」である。ページ数は104まで増加している。ページ数は増えているものの、雑誌の価格を抑えているようにもとれる。以下に見てみたい³²⁾。

私は海国少年の再刊を心から祝します。今日まで私の好きな雑誌は海国少年よりほかにはなかったのですが、所か九月号より影が見えなくなりましたから、私は度々電話や手紙でお尋ねしたのですが一時休刊したと云ふお話で、何時再刊するのかわからなかったのです。（中略）再刊されて只見劣りするのは紙の悪い事と印刷のまずい事ですが次号からは此の唯一の欠点を補つて下さい。望むのは毎号海軍や陸軍の立派な方の訓話を出して戴く事です。（大阪、富山秀雄）

再刊を祝う「大阪 富山秀雄」であるが、「再刊されて只見劣りするのは紙の悪い事と印刷のまずい事ですが次号からは此の唯一の欠点を補つて下さい。望むのは毎号海軍や陸軍の立派な方の訓話を出して戴く事です。」とあるように、雑誌の品質の悪さを指摘している。出版社の経営事情が悪化しているのか、わからない。愛読者からの切なる願いが読み取れる。「軍人」の訓話の掲載を希望し、将来（海軍・陸軍）の兵士になることへの、意識を高めるようとしたのか。

3 人気の衰えない樺島

また、誌面の売れ行きは増減があったようだが、樺島の絵を話題とした投書については依然と変わらず多かった。以下は、同誌第2巻第1号（1918

年1月)から同誌第2巻第11号(1918年11月)までの発刊期間におけるキーワードの分析である³³⁾。

表2 『海国少年』にみられるキーワード
(同誌第2巻第1号から同誌第2巻第11号まで)

・「海国少年」 ・「樺島先生」(樺島勝一)、「樺島画伯」 ・「科学談」 ・「海国的訓話」 ・「記者先生」 ・「愛読者」「読者」「愛読者諸君」

同誌第2巻第1号からの「読者通信」欄を見てみると、新しく加入予定の読者の紹介や同誌に関連した小グループの結成報告、文芸欄や通信への投書の多い者から番付にした一覧を公表したりする読者が増加した。投書家のひとりであった「大澤寒泉」は、自らの名前が掲載されているところに、押印し、目印にすることで、自身の誇りやステイタスを感じたのであろう。

同誌第2巻第12号(1918年12月1日号)より価格が値上がり。1冊あたり「11銭」から「20銭」になる。第一次世界大戦の影響による物価の高騰であろうか。

それに伴い『海国少年』の表紙にも変化がみられるようになった。「キャスケットをかぶるオシャレな少年」(同誌第2巻第12号)、「歌舞伎俳優の少年」(同誌第3巻第1号)、「雪合戦をする少年」(同誌第3巻第2号)など今迄に見られない特徴的な表紙であった。

同誌第3巻第3号より表紙が「軍人」に、同誌第3巻第4号は「海軍兵士」、以後第8号まで「軍人」が表紙に掲載されている。しかしながら同誌第4巻第11号は「おしゃれな黒帽子をかぶった少年」が表紙になることから、『海国少年』の表紙のイメージも揺れていることから、方針の統一が難しくなってきたことが想定されようか。同誌第3巻第5号(1919年5月1日号)より、「印刷所の変更」が誌面に掲載され、揺らいでいる事情に拍車をかけることになった。

4 学習面を取り入れた誌面作り

かくして誌面の編集方針が揺らぐ中で、『海国少年』の誌面には「なぞなぞ」(同誌第3巻第6号)、「歴史の試験」(「武蔵坊弁慶」・「楠木正成」・「竹内宿祢」・「坂上田村麻呂」・「大石義雄」・「曾我五郎」の生まれた順番に並び替えよ)(同誌第4巻第8号)、「汽船の行方」(同誌第4巻第10号)、「二人の英雄」(同誌第5巻第1号)、『よしひとでん ぼおとれえとなれ』から、日本の英雄1名、外国の英雄1名が隠されているため、探し当てる」といった斬新なものが相次いで掲載されていった。このことから、読者への「学習面」を意識した懸賞の登場していることがわかる。当時の人気少年雑誌で知られた『少年世界』、『少年倶楽部』なども学習教材を誌面に取り入れるようになってきたことから、当時の風潮であったことと関係しているかもしれない。そのことは読者の年齢層からも把握できる。誌面に記載されたものを見てみると、13歳から15、16歳の少年読者が多いことがわかる。

また、『海国少年』にみられるキーワードについても、若干であるが、キーワードに変化が見られるようになる³⁴⁾。

表3 『海国少年』にみられるキーワード
(同誌第3巻第1号から同誌第3巻第12号まで)

・「海国少年」 ・「記者先生」 ・「愛読者」「愛読者諸君」・「樺島先生」 ・「欧州大戦争」 ・「日本海海戦」 ・「投書家」 ・「賞品」

「欧州大戦争」や「日本海海戦」「戦争」を意識したキーワードが見ることができたり、樺島先生のキーワードも掲載されているのが伺える。また愛読者の紹介記事がますます増加している傾向にある。誌面での交際などを求める記事はみられない。第4巻第1号から第12号を以下に見てみたい³⁵⁾。

表4 『海国少年』にみられるキーワード
(同誌第4巻第1号から同誌第4巻第12号まで)

・「海国少年」
・「記者先生」
・「愛読者」「愛読者諸君」
・「給仕」「給仕君」
・「没書」「没書欄」
・「懸賞」

上記の表を見てみると投稿作品の件や給仕への投書などが中心になっており、樺島の絵に関する投書も随分見られなくなる。また自分の日記的な内容を報告するものも多くみられるようになった。「海国少年らしい」内容の投書はほぼ見られない。同誌の第5号以降を見てみよう³⁶⁾。

表5 『海国少年』にみられるキーワード
(同誌第5巻第1号以降)

・「メダル」
・『海国少年』
・「記者先生」
・「愛読者」「愛読者諸君」
・「給仕」「給仕君」
・「懸賞」

第4巻以降と同じ特徴がみられるが、投稿作品の件や給仕への投書などが中心になっており、樺島の絵に関する投書も随分見られなくなる。また自分の日記的な内容を報告するものも多くみられるようになった。「海国少年らしい」内容の投書はほぼ見られないのがうかがえよう。

V 『海国少年』の読者—読者を「兵士」 として鼓舞するための雑誌の廃刊と対外 戦争の激化—

『海国少年』はすべての資料が現存していないため、残された資料から当時の様子を伺うことしかできない。海国少年社は大手の出版社とは異なり、小さな出版社として同誌を発刊し続けたことは少なくとも確認はできる。海国少年社での同誌の発刊にも異変が生じるようになる。諸般の事情

から同誌第6巻第5号(1922年5月1日号)は同社で発刊を継続している様子は感じ取れない。雑誌の発行所が「海国少年団」になっているため、印刷業者が引き継がれたのか、それとも廃刊となったのか、正確なことは言えないのが現状である。いずれにせよ、同誌が短命に終わった雑誌であったといえるであろう。

同誌は、その後「ハタデー」への参加、「海軍記念日」の小旗づくりに同誌読者を勤労奉仕させている。「海軍記念日」の広告に誌面が使われることにもなった。また「海国少年団」への勧誘および広告掲載がなされ「堅実なる自主的国民思想の養成」、「開国進取の国是を徹底せしむ可き海軍思想の普及」(海国少年団団長 河合秋平)が示された。同誌がそのような海国少年関連団体に利用されるようになっていったような感がある。

同誌の読者は、発刊当初から勇猛な兵士に憧れたり、なりたいという思いを持った者が存在していた。しかし読者投書欄を見ると、誌面を通じての交流や作品投稿に精を出す者が少なくなかった。「剽窃者」に対し、厳しく接する者、思いやりをもって交流する者など様々存在しているもの、兵士への強い思いを抱くのなかではなく、むしろ愛読者仲間との交流、作品投稿などに力を注いだ。

時を経るごとに、同誌は編集方針の統一が難しくなっていく事情が見られた。このことは同誌の表紙の変化からもうかがい知ることができる。

同誌は海国少年社から、海国少年団に編集社が変更になり、「海国少年団」の下部組織として機能していく方向性がとられて行くことになった。『海国少年』は『少年世界』、『少年倶楽部』のような大衆人気雑誌にはなり得ず、短命で廃刊となった。

VI おわりに—『海国少年』の読者像—

では、『海国少年』の読者像はどのように形成されたのであろうか。『海国少年』は、海国少年

社より発刊された少年雑誌であった。早い時期から少年雑誌を発刊していた金港堂、博文館、実業之日本社など大手老舗出版社とは異なり、東京にある目立つことが少ない小出版社においての同誌の発刊であった。

「海国少年」と雑誌のタイトルにあるように、欧米諸国との戦争に負けない強い少年兵を育てるために、「海国少年らしい」少年を育成することを趣旨に置いた少年雑誌を発刊していった。海国少年らしさを身につけることになったのは、同誌の専属画家であった樺島勝一が存在が大きかった。樺島の飛行機などの作品は読者の心を魅了した。多くの少年読者が樺島の絵を好み、評価することで樺島人気はまたたくまに知名度を得るようになった。樺島の人気ぶりは誌面投稿欄を見ても明らかであった。

樺島人気にあいまって、さまざまな少年兵などの記事を掲載して同誌であったが、戦争記事から読者への「学習面」を意識した懸賞、記事が誌面に登場することになっていった。同誌は学習教材の側面をおぼるようになった。

当時の人気少年雑誌で知られた『少年世界』、『少年倶楽部』なども学習教材を誌面に取り入れるようになってきたことから、当時の風潮があったことと関係しているかもしれない。そのことは読者の年齢層からも把握できる。誌面に記載されたものを見てみると、10歳から15、16歳の小学校高学年の児童、中学生ら生徒ら少年読者が多いことがうかがえた。

同誌の愛読者は、発刊当初から勇猛な兵士に憧れたり、なりたいという思いを持った者が存在していたが、読者投書欄を見る限り、誌面を通じての交流や作品投稿に精を出す者が少なくなかった。「剽窃者」に対し、厳しく接する者、思いやりをもって交流する者など様々存在していたが、兵士への強い思いを抱くのなかではなく、むしろ愛読者仲間との交流、作品投稿などに力を注いだ者が見られた。僅か5年ばかりで廃刊となったこ

とから、「海国少年らしい」少年兵のための雑誌になりえなかったこともその理由にある。

そのことは同誌は編集方針の統一が難しくなっていく事情と関係がある。同誌の出版社が「海国少年社」から「海国少年団」に変更となっていることから同誌の編集方針に動揺が見え始めていることがうかがえるようになった。

やがて「海国少年団」の下部組織として機能していく方向性がとられて行くことになった³⁷⁾。『海国少年』は『少年世界』、『少年倶楽部』のような大衆人気雑誌にはなり得ず、「海国少年らしい」少年を多く輩出していく手前で同誌は短命で廃刊となった。

さて『海国少年』の読者をはじめ、当時の子どもたちは、現在のようにメールやLINE等のSNSといったコミュニケーションツールが存在していなかった。しかしながら、子どもたちは雑誌などに寄稿し、仲間を見つけ、投書欄を起点に同誌を愛読し、愛読者仲間を形成した。誌面上で投稿者仲間に「誌友諸君！」と声掛けて呼びかけを行い自らを「愛読者」と称しながら、連帯し、仲間を形成した。そのため投書家らは、次号の発刊が待ち遠しい思いでいっぱいになり、雑誌が手元に届いた時の喜びを嘯みしめ、さかんに投書行為を行うことで、コミュニティを形成した³⁸⁾。

かくして読者投稿欄は仲間同士の絆・連帯感を培う、いわば機能・装置ともなっていた³⁹⁾。

現代を生きる子どもたちは、「メル友」とか「LINEグループ」という言葉表現をよく口にす。 「メル友」や「LINEグループ」でつながっている仲間は、はたして本当の友といえるのか？ 彼らに対し真剣に喜怒哀楽の表情をみせることができるのか？そこに「絆」や「連帯感」は醸成されているのか、執筆者は答えに窮する⁴⁰⁾。

現代の若者に対し、今一度「友達とはどのような存在であるのか？」、「真の友人とは何か？」について真剣に考える機会になることを本論を通じて願うばかりである。

【註】

- 1) 出版社の「海国少年社」について、執筆者がこれまでに調査したが、所在地が「東京海国少年社」という届け出がされており、東京市南佐久間町1丁目1番地に存在したこと、また同誌の発行人・編集人は橋本猛義・沼野保吉であったことのみであり、不詳の部分が多い。
- 2) 拙論 2009「近代少年雑誌における読者に関する一考察—明治期～昭和初期における『少年世界』の読者の特徴を中心に—」（『順正短期大学紀要』第38号）。
- 3) 『少年世界』は、博文館から1895年に発刊され、1934年までの40年の長きにわたって発刊された雑誌である。（坪谷善四郎1934『博文館五十年史』）。同誌の前誌は『幼年雑誌』と呼ばれるものであり、当時の多くの少年読者らに人気を博していたといわれる。（岡谷英明1996『『幼年雑誌』における読者共同体の教育史的意義』『日本の教育史学』第36集、東京法令）。
- 4) 『少年界』は1875年に原亮三郎により設立された金港堂より発刊された日本最初の少年総合雑誌であったといわれ、物語、伝記、小説をはじめ、詩、短歌、俳句などの作品投稿欄も設定されていた。金港堂は雑誌の刊行のほか、教科書の出版も行っていたことで知られているし、文学では言文一致体で書かれた二葉亭四迷の『浮雲』なども出版された。
- 5) 『少年界』（1902年発刊）と『少年世界』（1895年発刊）の両誌は、ほぼ同じ時期に刊行された少年雑誌であったことから、両誌を掛け持ちして購読していたりしていた読者も存在したという。
- 6) 両誌以外にも、多くの少年雑誌（講談社『少年倶楽部』、実業之日本社『日本少年』）でも剽窃行為は横行していた。雑誌の誌面に掲載されることがステータスになっていたものと考えられる。
- 7) 少女雑誌の投稿欄について分析・考察については、これまでに本田和子をはじめ、今田絵里香、渡部周子、佐久間りか、嵯峨景子らの一連の研究が存在する。
- 8) 川村邦光1993『オトメの祈り—近代女性イメージの誕生—』（紀伊國屋書店）には、『少女の友』をはじめとした明治末から昭和初期にかけて発刊されていた女性雑誌を取り上げ、オトメたちがつくりあげてきた不思議な共同体とはどのようなものかについて論じている。独自の文体を駆使した投稿文や当時の雑誌記事、広告、写真をもとに「少女たちのワンダーランド」の秘密をときあかしたものである。
- 9) 今田絵里香2001「少女雑誌『少女の友』分析から」（日本教育社会学会『教育社会学研究』第68巻）。
- 10) 同上。
- 11) 前掲8）、川村書。
- 12) 同上。
- 13) 成田龍一1994『『少年世界』と読者する少年たち—一九〇〇年前後、都市空間のなかの共同性と差異』（『思想』678号、岩波書店）。同論文では1900年前後の時期に焦点を当て、「読者する少年」の様相と仲間の形成について論じている。
- 14) 読者の年齢や学歴については、取り扱った同誌においては明確に記されている事情が少ない。そのため誌面に記載されている言葉を手掛かりに判断することにした。
- 15) 「発刊の辞」『海国少年』創刊号（第1巻第1号）、1917年4月1日号。
- 16) 同誌第1巻第2号（1917年5月1日号）。
- 17) 拙論2013「児童雑誌『おもしろブック』に関する読者の研究」（『共栄大学研究論集』第12号）。
- 18) 前掲16）、同誌第1巻第2号。
- 19) 同上。
- 20) 「福岡の山口鉄腸君誌上で御交際を請ふ」（広島 藤井翠城）同誌第1巻第6号、「読者通信」。
- 21) 同誌第1巻第3号（1917年6月1日）。
- 22) 「海国少年誌友支部の結成」、同上。
- 23) 「親愛なる読者諸君へ 記者」、同上。
- 24) 「読者通信」よりみられる共有意識・キーワード（創刊号から第1巻第8号まで）。
- 25) 前掲21）、同誌第1巻第3号。
- 26) 同誌第1巻第7号（1917年10月1日号）。
- 27) 同上。
- 28) 「『海国少年』一時休刊へ」（同誌第2巻第1号、1918年1月1日号）。
- 29) 拙論2014「子どもたちが愛した少年倶楽部・少女倶楽部・幼年倶楽部」『第85回企画展 私の宝物—野間清治と少年少女雑誌の世界—』群馬県立土屋文明記念文学館）。
- 30) 同上。
- 31) 同誌第2巻第1号、1917年12月10日号）。
- 32) 「再刊を祝す」（大阪、富山秀雄）同上。
- 33) 『海国少年』にみられるキーワード（同誌第2巻第1号から同誌第2巻第11号まで）。
- 34) 『海国少年』にみられるキーワード（同誌第3巻第1号から同誌第3巻第12号まで）。
- 35) 『海国少年』にみられるキーワード（同誌第4巻第1号から同誌第4巻第12号まで）。

- 36) 『海国少年』にみられるキーワード（同誌第5巻第1号以降）。
- 37) 拙論 2014 「近代少年雑誌『世界少年』における読者の研究」（『関西教育学会年報』通巻第38巻）。世界少年社の発刊した同誌は、やがて愛読者らが同誌が協賛していた「世界少年団」なる組織に加入し、修養団活動、ボーイスカウト活動についても展開することになった。
- 38) 拙論 2023 「投稿欄によって構築されるもの」『子どもの文化』（子どもの文化研究所、11月号）、「特集2 投稿する文化」。
- 39) 同上。
- 40) 同上。

主要資料・参考文献

- 田中卓也 2018 「スポーツ少年」の登場と読者共同体の形成に関する研究—『日本少年』・『少年世界』を中心に— 静岡産業大学紀要『スポーツと人間』第3巻第1号。
- 増田義一 1958 『実業之日本社八十年史』 実業之日本社。
- 本田和子 1990 『女学生の系譜—採食される明治—』 黒

土社。

- 今田絵里香 2007 『「少女」の社会史』（双書ジェンダー分析17） 劉草書房。
- 稲垣恭子 2007 『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』 中公新書。
- 田中卓也 2013 「近代少女雑誌『少女界』の読者に関する研究—投書欄「女子談話会」の投書を中心に—」 『越谷保育専門学校研究紀要』第2号。
- 嵯峨景子 2016 『『女学世界』における投書の研究』 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No. 77。
- 渡部周子 2007 『〈少女〉像の誕生—近代日本における「少女」規範の形成』 新星社。
- 今田絵里香 2019 『“少年” 少女 “の誕生”』 ミネルヴァ書房。

付記

本稿は、日本保育学会第74回大会富山大会（富山国際会議場・富山大学）ポスター発表（2021年5月16日・17日）の内容に加筆修正を加えたものである。

（2024年1月22日受理）